

海嶺の裂け北天に血が滲み 渡辺誠一郎

(句集『地祇』 平成二六年・銀蛾社刊)

作者は一九五〇年生まれで塩竈市在住、現在俳誌「小熊座」

編集長。既に句集『余白の轍』『数えてむらさきに』があり、

本句集はその後の十年分の作品を収めた十年ぶりの第三句集である。もちろん、先の東北大震災の被災地でもあり、心の揺れは「あとがき」に「震災詠も何とか作ったが、現実を前に筆が折れる思いだった」と記す通り、想像を超えたものであったと思われる。

本句集では、特に前半は〈吹く風は錆の味する炎暑なり〉〈みちのくの一瀑冬の朧なり〉〈電車から手を振るごとき金魚なり〉〈ぼろぼろの水母の鼓動確かめる〉〈寒の水掬えば身の内さざなみす〉など、さまざまなレトリックを駆使し様々な喩の成立を試みている。「みちのくの」の句など、主宰高野ムツオ氏の風土詠〈奥歯あり喉あり冬の陸奥の闇〉の擬人化に学んだものがある。また、大地震と原発事故の後には、〈原子炉に水打つ女が夢に立つ〉という句が詠まれる。奇想

に過ぎるとする向きもあるが、直前に〈大地震の箱庭縮む日なりけり〉〈永劫のただ中に立つあやめ草〉、直後に〈盗汗かくメルトダウンの地続きに〉〈セシウムの降りて盗汗が内臓に〉があるのを見れば、尋常ならぬ切迫感の中で逃げ場のように現れた地母神の化身であったか。

ところで、上掲の句は震災の「機会詩」には違いないが、事実直叙ではなく想像力駆使の深い感受の句でもある。仕立ては対句風で、海嶺から北天へと発想がダイナミックに飛躍する。その結果、海嶺の震裂が北天の流血につながるかのような詩的有機性を獲得する。「血が滲み」は〈青空の暗きところが雲雀の血 高野ムツオ〉の影響を潜つていようが、海底と天空との大きな対照により、厳しい原初的な垂直性が成立した。「北」は北辺の風土への意識を暗示するものである。深く意識を揺さぶる悲歌である。

一方、後半には〈黙禱の息小さくし震災忌〉〈越冬の水漬く原子炉濁世また〉〈魚の腸ゆるみてうるむ春日かな〉など写実的な直叙の句にも佳品を得る。そして、最終章の〈北斗へと潮吐く大魚やませくる〉からは、次の作風への新展開を感じてやまない。この大作の行方も楽しみにしたい。

二度舐める大きな切手春よ来い 満田三椒

（句集『紀伊日和』 平成二六年・本阿弥書店刊）

同人の満田三椒さんが第一句集を上梓された。インターネット句会の前身のパソコン句会の頃からのお付き合いなので、殊の外うれしい句集刊行である。句集の特徴については序文に書かせていただいたので省略するが、一つは向日性の愉快な句が多いことである。深刻な句は実体験を踏まえての事が多いので、時に重くれた句にはなるが浮薄にはなりにくい。しかしながら、明るく軽い句はともすれば通俗性を帯びて一本調子に走ったり、奇譚に走りすぎて作意が目立ったり、感覚まかせで文意不明になったりしやすい。自戒を含めてのことでもあるが、明るい句は実際には思った以上に成功するものが難しいのである。

前置きが長くなってしまったが、この句は以前「秋」で巻頭にいただいたことがあった。そのときの寸評をここに再掲しておこう。

「なるほど日常生活の些事の中にも、このような詩が潜んでいた。切手を舐めるのは普通だが、「二度舐める」ことを発見した面白さを感じとったところが、この句の手柄。いつもとは異なる大判の記念切手を購入し、二度舐めることを楽しんでいる。くつろぎながら、すぐそこに来ている春を呼びこんでいるような気配の句だ。」（「秋」二〇一〇年六月号）

ところで、この句でもう二つ指摘しておきたいことがあった。この句の口語的リズムである。文語なら厳格には「舐むる」になるが、満田さんは「舐める」とあえて普段馴染んでいる口語を選んだ。「春よ来い」が自然に生きているのもそのせいである。私などはできる限り文語的な動詞変化を尊重してきたが、安易にさえ用いなければ、時代の流れは口語的变化の文語にも活路をひらいているということだろう。

「眺ねる」「眺める」なども同断の傾向がある。

また、「春よ来い」とは季語で言えばまだ冬であるが、「春よ来い 早く来い あるきはじめた みいちゃんが」の和んだ歌（弘田龍太郎作曲・相馬御風作詞）に影響されてか、すでに柔らかな春の日差しに心遊ばせているかのような錯覚に陥るのも、どこか不思議な感じがする。

たのしげに山は雲吐く星祭 鍵和田柚子

（句集『濤無限』（平成二六年・角川学芸出版刊）

この句集は傘寿を迎えた著者の第九句集で、七年間の作品四六二句を収める。帯文には、「句集名の「濤無限」は神奈川県大磯のこよろぎの浜で詠んだ句〈田位忌の波の無限を見てをりぬ〉から採った。濤の無限は西行の世界の無限であり、文芸の世界の無限でもある。俳諧における真実を大切にして、一筋の道を継承してゆきたい。」と記す。作者は鳴立庵の第二二代庵主でもある。「田位」は西行の法名。もちろん「鳴立」は〈こころなき身にもあはれは知られけり鳴立沢の秋の夕暮西行〉に由来する。

さて、この句集は、特に前半、必ずしも明朗な心境句には彩られていない。晩年意識を受容するまでの、憂愁、幽寂、孤愁など、心の翳りを引く句が散見される。〈夕日より深き沈黙くわりんの実〉〈ほととぎす聴いてかなしも豊葦原〉〈残生や蓮の実飛ぶを待つことも〉〈浮寝鳥離れし一つわれなるや〉

〈滝しぶき浴びて敗者のごと戻る〉〈晩年や夜空より散るさるすべり〉〈柿食うて齡の冥さ振り払ふ〉等々。傘寿へ向かう内の葛藤とも言えようか。

だが、これらと対照的に後半は、作者本来の健やかな心と氣力を思わせる明澄な句も次第に増えてくる。〈川は行く一月の波片寄せて〉〈さざなみは光をはこび機始〉〈地震過ぎし一湾の輝り蝶生る〉〈みどり透く神の色なる子かまきり〉〈育ちては悪童がほよ月の河豚〉〈水霜や氣力うすうす増すごとし〉〈武蔵野の余り風来る昼寢覚〉〈鷹放つ山の骨相あらはなり〉等々。これらには、しずかな老境に映し出される生命感の明快な光を感じる。

そして、上掲の句は後半に登場する。前書などから判断すると「山」は富士山だが、一句独立で考えれば特定する必要はない。晩節への光と影の内的葛藤をすいと脱け出したような無邪気で快活な句である。「たのしげに」の俗語使用と、「山は雲吐く」の擬人化と、思い切った方法を用いて、「星祭」の日の陰陽を朗らかに共存させた。山も人も共にのびのびと楽しそうだ。その在り方の中に、傘寿を迎えた作者の晩節意識もしずかに息づくのであろう。

不知火や櫓舩のきしむ父の海 中村石秋

（角川書店「俳句」平成五年十月号）

五月に長逝された中村石秋さん（「秋」顧問）は、「秋」の創刊の頃からの古い同人で、同時に下関で「其桃」を長く主宰され山口の文化にも大きな貢献をされた。若い頃は水産加工の大洋漁業に勤務され、退職後は在勤の長かった下関に居を定められたが、もとは九州人であったと聞く。

石秋さんの句は退職後の作句期間が長かったこともあり、下関という郷土の自然や生活を慈しむ眼差しに満ちている。自然であれば、〈石叩汐木に乗りて町にくる〉（つばくらめ地を擦り吃水深き船）〈冬の高圧して海猫の胸豊か〉（泊地なき海月反転して沖へ）〈梅の谿夜は海鳴りの栖とす〉（海峡にこめの一韻凍てこぼす）などをはじめ、海峡に面した地に棲息する鳥や動物などを具体的な写生によって描き出している。海峡と言うのは、海流のさまざまな様態が見られ、海光の溢れるところでもある。作者の最後の発表作の一つである〈赤

らみて海光群るるさくらんぼ〉も、さくらんぼとそれを仰ぐ作者を「海光」が慈悲の光のようにくまなく包んでいる。

また、生活について言えば、水産や造船など海峡の町らしい句が散見される。生活感の強い風景が、これも海の光に照らし出される。〈松露搔く背を包み降る海の霧〉（火の海の提灯揺るる霊迎へ）〈紫蘇摘みて舩の隅に妻の住む〉（魚棚の市場仕舞ひの三尺寝）〈飛魚売女胸緒拵げ見せにけり〉（梅咲けり造船工は鋼の香）などをはじめ数多く発表されている。いずれにも感覚を大事にした確かな写生句で、たいへん人間くさい親しい風景となっている。

冒頭の句は、「海」「父」という主題を奥に秘めた作者の詩的原風景である。不知火は八朔の頃に八代海や有明海に見られる光の屈折現象らしいが、昔は妖火とも言われた。不知火を眺める作者に、ふと沖合から舟をこぐ櫓の音が聞こえてくる。櫓舩の軋み音に遠き父祖からの血脈を感じたに違いない。また、その海は豊饒で優しい「母の海」ではなく、漁労や戦や冒険などで代々男たちが漕ぎ出して行った野性的な「父の海」であったというのだ。きりりとした文体の中に、幻想的な父恋いの原風景が浮かび上がる。

兵なりき死ありき星辰移り秋 文挾夫佐恵

（句集『白駒』（平成二四年・角川書店刊）

今回、文挾さんの全作品を読み直してみても、特に戦時中の波乱万丈の生活句を改めて紹介しておきたいと思った。戦争に翻弄されながらも、新しい命と自分の命を守り、夫の無事を祈りながら必死で生きるという心境は、紋切り型の言葉では言い尽くせない。実感や肉声は、非力な短詩であれ、やはり文芸の言葉が届けることになるのである。

特に戦時の句には前書が多い。石原八束の戦争体験の句も前書が多かった。俳句がいつ遺言になるか分からない状況では、一句独立としての完成度云々よりも、特殊な状況説明を付しながらでも、切迫感の中で生き延びる心の叫びを、少しでも正確に伝えることが大切だったのかもしれない。

炎天の一片の紙人（ひ）間（と）の上に
征く父に抱かれ睡れりあせもの児

応召数日後列車の赤羽通過を知らせくれし人あり、

赤羽より品川へ追ふ、憲兵の眼を避け遠きホーム
より見送る

ひそかなる訣別の窓のひとり応へ

ねむり子を抱き炎天を追ひ行けり

弟外泊許可を得て来る

兵なればアツツ語らず蚊火に坐す

五月廿五日夜半油脂焼夷弾の直撃数発を家に受く

記憶のみ焼けず瓦礫をわたる南風

帰還兵なり雪嶺の下に逢ふ

これら若き日の一連のドラマチックな体験を知ると、第六句

集『青愛鷹』の〈戦死とは何なりし満つ霜の声〉や、冒頭に

掲げた句も、残像と共に感懐が増幅されて心に深く届いてくる。

この句は三段切れどころか四段切れのような文体であるり、戦時の兵の死、銃後の人々の死、戦後六十年の間の身近の人の死、などさまざまな解釈も成り立つが、「星辰移り秋」ですべてが静かな哀感と共に収斂する。諦念とは簡単に言えない複雑な心境がようやく澄んできたかのような印象を受けるのである。

病窓や監獄ロック春帽子

有山兔歩

(『有山兔歩遺句集』(二〇一四年)・NPO法人日本詩歌句協会刊)

作者は「鷗座」同人。主宰の松田ひろむさんによれば、(有山さんは)俳人、考古学者、競馬愛好家、若い時に新劇俳優を目ざした。「そんな兔歩さんが、腰が痛い、腕が痛いといっていたと思ったら、なんと肺癌との診断を受け、あつという間に亡くなってしまった」とのこと。三・一一の翌月四月二五日、七十四歳間近でのご逝去であった。

この句は最後の「絶唱」の章に収められている異色作。入院俳句に「監獄ロック」(Jailhouse Rock)などを俳語としてあしらうなど奇想天外の異色作だ。

この句については、松田ひろむ主宰が紹介されている同人・田辺花さんの鑑賞を引く。

※病院では規定の時間に起床、食事、就寝と、毎日の時間の流れが自分の時間であって自分の時間では無い。ところが兔歩さんは「監獄ロック」と言い放つ。「監獄ロック」はエルヴ

イス・プレスリーのヒット曲で主演映画である。エルヴィスの甘い歌声が病室を包み、ロックのリズムで時間が流れている。翻って窓の外に眼をやればパステルカラーの帽子の人々が春を謳歌している。

(以下略) ♪ (田辺 花) (『鷗座』二〇一三年八月号)

病室に閉じ込められながらも、(病室にロックンロールを流すことは普通は考えられないので)若き日に心酔したプレスリーのロックを胸いっぱい思い出す。プレスリーの不良っぽいワイルドなキャラクターと、州立刑務所を舞台にして囚人たちが踊りながら生き生きし始める熱気に、彼自身も熱い気持ちながよみがえる。あちらこちらから患者たちも元気に踊って集まり、看護師たちも踊り、自分も起き上がってプレスリーのように踊る。壁に掛けていた春帽子をかつこよくかぶって、晴れやかに、皆でロックで踊って、このまま凱旋だぜ。死病の最期をひたひたと感じながらも、こんなに想像力を豊かにめぐらせ、読み手を明るくして笑わせてくれる句。諧謔はこんな現代風俗の中からも生き生きと生まれる。涙がどんな生まれ、どんな乾いていく。生前に一度お目にかかりたかったなあと思う。

短日のピアノを噛んでいた子供 長嶋 有

『春のお辞儀』（二〇一四年）・ふらんす堂刊）

子供はとんでもないことをする。だから面白くもあり、困りものでもある。もちろん、この句の「いた」は過去の回想ではなく、（私が部屋に入ったとき）「噛んでいた」という過去のある時点における進行形であろう。標準形だと〈短日のピアノを噛んでいる子供〉となるのだが、放任しておくみたいで間延びがする。これに対し、本句は会話をしながら不意に飛躍した場面に惹き込むような瞬間的効果がある。「短日」も秋の哀切な光を感じさせて効果的だ。

ひよつとしたら噛んでいたのは玩具のピアノかもしれないが、「ピアノ」と書かれている以上、（グランドかアップライトかは想像自由だが）読者は大人のピアノとして受け取る。少なくとも強烈な第一印象はそうだ。奇天烈で違和感のある情景だが、第一発見者の「あっ」という声にならない叫び以外、音は感じられない。それも不思議だ。

ふつうピアノは音が鳴るものだ。ピアノに向かう人の関心は遊ぶにしても練習するにしてもピアノを鳴らすことだ。なのに、この子にとってはガラガラや、サークルの手すりや、食器（うちの子は皿を齧ってしまった！）のように、ピアノも「齧る」対象だったのだ。フロイト心理学的の「口唇期」よろしく、「ピアノを噛む」とは快感だったのかもしれない。とすると、つるつるの黒塗りグランドピアノよりも、少し年季が入ったアップライトの方が歯にもなじみ旨そうだ。

考えてみれば、特に管楽器など、マウスピースに唇がなじんでいる時間など、おしゃぶりの延長のような快感がある。違うのは、そこから快感が音となり音楽となってこの世に生れ出ることだ。この句の幼子はピアノを齧った感触をいずれ忘れてしまうのか。蘇る日があるのだろうか。

「短日」に絡めて蛇足めいたことを言えば、この子の「齧る」動機は一人ぼっちの心細さだったかもしれないが、ピアノを齧っているうちに快感に溺れる自由さを覚えてしまったのだろう。これから成長して老いて死ぬまでに、この忘我の時間に何度出くわすことか。「うそ話」でもよい。子どもにとっての貴重な初体験の一つがここに結像した。

月白や渦まき初むる沖の浅瀬（そね）一丸文字

（秋福岡句会句集『玄海譜』：平成二十四年一月、花乱社刊）

「そね」とは浅瀬名の呼び方の一つで、作者の住む北九州から五島列島あたりの海には「曾根」を付した岩礁がよく見られるそうである。直接「曾根」あるいは「ソネ」と書かずに、一般に分かりやすい「浅瀬」の漢字表記を選び「そね」とルビを振ったものと思われる。例外的な処理だが、音韻的な効果も含めて納得できる。

この句集『玄海譜』は福岡句会の合同作品集だが、本誌の別ページにも記したように会員十七名の作品を収めてある。だが、やはり眼目は句会代表・一丸文字さんの作品である。〈鬼神楽陰（おん）の出の笛吹かれけり〉を収めた前句集『陰の出の笛』（牧羊社）を出されてからすでに約四半世紀。その意味でも本句集に載せられた三十三句はさすがに厳選されている。心象に合うことばを何度も選んでは練り直す旧来からの基本姿勢はこの二十五年間揺らいでいないことが、どの句

にも見てとれる。

その中でも、この句は的確な語の選択によって、句全体が隅々まで息づいている印象を与える。句の意味は難しくない。秋の名月が昇ろうとして東の空が白々と明るみを増す。「月白」は異界を引き寄せそうなほど、いつも神秘的で幻想的である。かつて「陰の出」から鬼を登場させた作者にしてみれば、何が登場してもおかしくはない。〈月しろの猯のとほつてゆきしやう 松澤昭〉という不可思議のままの出し方もある。しかしながら、作者はここで「渦巻き初むる沖の浅瀬」という平面的な奥行きを持った自然の景を差し出した。〈渦鳴や海恋桜そらに舞ふ〉という句もあり、「渦」は遥かから歳月と共に作者の内心と呼応するものであろう。しかも、その渦は鳴門の渦潮のように深くはなく「浅瀬」である。遠浅の沖に渦巻き始めた波の穂がこまかい光を見せながら月白の明るみに浮かび上がる。約四十年前〈麦焼きの北は玄海遠鳴りす〉とも読んだ玄海は、いまや渦巻く浅瀬という心象風景として息づいている。沖の渦巻きがありありと見える、幻想美の大きなスケールの秀品となった。

人とその影加賀友禪を晒しをり 石原八束

（句集『人とその影』（昭和六二年刊）・三一書房刊）

作者の身近で行動していると、事実の印象が強く、客観的な句の内実を時に見失うことがある。この句もそんなものの一つ。新年に、たまたま松本詩葉子さんの評文（現代俳句協会HP「現代俳句コラム」・平成二四年一月二二日）が目に入り、その解釈に納得したので紹介したい。

この句の成立は、もう三十年も昔の「秋」の練成会で訪れた真夏の金沢である。私たちが見たのは、浅野川で観光客に見せてくれた友禪流しであった。この句の「影」は暑い日射の中で殊に影濃く働いているように思われた。それは当時居合わせた者としての実感でもあった。

さて、詩葉子さんの評文を一部引こう。

「私の住む金沢市内を二つの川が流れている。（中略）その一方のをんな川である浅野川の冬の風物詩が、加賀友禪流しである。（改行）加賀友禪は、加賀百万石の武家文化に対し、町

方から発祥した町人文化である。十七世紀ごろ京都より友禪染の技術が伝わり発展した。（中略）近くに寄ってその光景を何度か見たことがあるが、雪のちらつく冷たい流れの中で、杭に止めた生地を束子や素手で懸命に洗い作業を続ける職人の姿は、伝統を守る厳しさを背負っている。（改行）きつと句を作った石原八束も、その職人の背中に負っている厳しい伝統の影、すなわちその魂を見たのであろう。」

いま改めて本句を見直すに、「加賀友禪流し」を季語と考えて冬の句とするのが妥当だと思う。「人」も描かれるが、この句では「影」の方が伝統文化を守る職人の厳しい内面を浮き彫りにする。「加賀」の一語を冠したのも、単に挨拶性だけではなく、北陸の厳冬に身を晒しながら伝統文化を継承した民の逞しさに敬意を表してのことでもある。八束は、若い時から旅を介して辺境の風土性と共振する。この句も、真夏の友禪流しを観察しながら、その奥に真冬の厳しい生業の風景を幻視していたのに違いない。

俳句は、一句独立として読まねばならない。年初の自戒と反省をこめて、詩葉子さんに感謝を述べつつ、先の「らくだ日記」の鑑賞文も冬の句として訂正したい。

初蝶やこの世は常に生まれたて 高野ムツオ

（平成二十四年作・句集『萬の翅』・角川学芸出版刊）

なんと瑞々しい肌触りの句であろう。

この句集は平成十四年から二十四年までの作品を収めたものだが、この間作者は二度の試練に出遭っている。一度目は、咽頭癌の手術。〈喉切られゆくなり飛燕思いつつ〉〈癌と闘う燈無辺へみどりの夜〉〈細胞がまず生きんとす緑の夜〉の三句が収められているが、運命を受け容れ、柔軟な感性と想像力を働かせて蘇生へのシナリオを創作する。いずれの句も、肉体の実感の裏打ちあつての発想であろう。二度目の試練は、平成二十三年春の地震と津波による大震災である。本句集にも〈膨れ這い捲れ攫えり大津波〉を始めとし、〈春光の泥ことごとく死者の声〉〈車にも仰臥という死春の月〉〈泥かぶるたびに角組み光る蘆〉〈瓦礫みな人間のもの犬ふぐり〉〈陽炎より手が出て握り飯擱む〉〈みちのくの今年の桜すべて供花〉など、生と死を直視して思い深く惨状を詠んだ句を収めてある。

いま冷静に見てみれば、〈車にも〉〈瓦礫みな〉〈陽炎より〉などは、大震災に限らない普遍性を得ている句かとも思う。

この大震災を経て、生と死と混沌を意識した作者の句の世界は言葉の裏付けを得、さらに一句の厚みと詩的実感が加わったようだ。歳月を経てからの句には、〈慟哭の百夜に翳雲一枚〉〈かりがねの空を支える首力〉〈初日影死者より伸びて来し羽か〉〈凍星や孤立無援にして無数〉など、虚と実、誇張法、身辺から天体(宇宙)との交感、対照性の意識、擬人化・疑物化、比喩など多彩な詩学が駆使されている。

さて、冒頭掲出の句に戻る。震災の傷跡に心を痛めている作者に「初蝶」は「生まれたて」の初々しさを運んできた。初蝶は毎日どこかで生まれ、それぞれ初めての世界に接する。それを思えば、震災による生活圏の壊滅の中からさえ、何が日々新たに生まれているはずだ。心に初蝶の棲む限り、「この世は常に生まれたて」となるのだ。想像力も併せた現代詩感覚を推し進める作者にとつては、なまじ諦観を得て悟り顔をするより、現実を深く感受し生者死者の声を聞き留めたいのだろう。「初蝶」との交感から「いま」の混迷を乗り越える力をいただくのかもしれない。